

2018.8.23
vol.68

シネマ・ド・リぶらの コラム・ド・シネマ

映画
を
読む

本日の上映作品 『この世界の片隅に』



1944年（昭和19年）2月。絵を描くことが好きな18歳のすずは、急に縁談話が持ち上がり、あれよあれよという間に広島市から海軍の街・呉に嫁にやってくる。彼女を待っていた夫・北條周作は海軍で働く文官で、幼い頃に出会ったすずのことが忘れられずにいたという一途で優しい人だった。こうして北條家に温かく迎えられたすずは、見知らぬ土地での生活に戸惑いつつも、健気に嫁としての仕事をこなしていく。

監督・脚本：片渕須直

原作：ここの史代

音楽：コトリンゴ

声の出演：のん、細谷佳正、稲葉菜月

製作：2016年 日本 カラー 129分

『呉戦災 あれから60年』	呉戦災を記録する会／編集・著		217.606
『なみだのファインダー』 広島原爆被災カメラマン松重美人の1945.8.6の記録	松重 美人／著	ぎょうせい	210.75
『呉・江田島・広島戦争遺跡ガイドブック』	奥本 剛／著	光人社	217.606
『この世界の片隅に』ノベライズ	ここの 史代／原作	双葉社	913.6
『日の鳥』	ここの 史代／著	日本文芸社	369.31
『小説夕風の街 桜の国』	ここの 史代／原作	双葉社	913.6
『夕風の街 桜の国』	ここの 史代／著	双葉社	726.1
『キネマ旬報』 2016-11 下旬 No.1732・2016-12 上旬号 No.1733			
『ミュージック・マガジン』 第48巻第12号 2016-11 656号			
『Tarzan』 第31巻第22号 2016-11/24 No.707			
『歴史群像』 第25巻第6号 2016-12 No.140			
『ミュージック・マガジン』 第48巻第12号 2016-11 656号			
『MOE』 第38巻第12号 2016-12 446号			
『日経エンタテインメント!』 第20巻第17号 2016.12 311号			
『アニメージュ』 第39巻第12号 2016-12 vol.462			

「すすさんと共に生きる至福の 126 分。戦時の日常を描く人間賛歌」

杉本穂高氏の『この世界の片隅に』映画評論 (2016年11月8日 <https://eiga.com/movie/82278/critic/> より)

大災害や戦争の影響を語る時、我々はしばしば犠牲者の数によってそれを語ろうとする。だがその数の裏には、犠牲者の分だけ途方もない悲しみが積み重なっている。人の命の重みは数によって決まるものではない。交通事故で家族を失った悲しさと戦争のそれとに、どれほどの違いがあるのか。積み重なった悲劇の山の大きさを知ること重要だが、その積み上げられた、塵のようなひとつひとつの人生を想像する力を決して忘れてはならない。

この史代原作、片渕須直監督「この世界の片隅に」はそんな小さな物語への視点を大切に作る作品だ。本作は戦争を伝える作品ではなく、戦争のある日常を伝える作品だ。原作のあとがきの言葉を借りれば「戦時下の生活がだらだらと続く作品」。日常のなかに平然と悲劇が入り込む戦時下の特殊性と、食べたり、笑ったり、喧嘩したり、愛したりといった普遍的な営みが同居する。少ない配給の中で工夫する食事がとても美味しくそうで、間抜けなことにはみんな笑い、連日やってくる空襲警報に

も次第に慣れ、防空壕の中で世間話に花が咲く。そんな日常を温かみある手描きの作画で切り取ってゆく。

とにかく、画面に映る人が、風が、海が、瑞々しい輝きを放ち、もうほとんどの日本人が体験したことのないはずの時代の息吹が画面の隅々から発せられている。漆黒のスクリーンにすうっと画面が映し出されてまもなく、この世界に引き込まれてゆく感覚。素朴で美しいアニメーションと声優陣の素晴らしい演技が一条乱れず調和し、この時代に生きたことはないのに懐かしさが胸いっぱい広がる。特に出色なのは主人公すす君の。芝居の良し悪しの次元を飛び越えて「すすさん」としてフィルムの中で生きている。

観客はこの映画を見ている最中、すすさんと共に生きるのだ。戦時下の過酷な時代にあっても、人間らしくあろうとする彼女と共に生きることを許してくれるこの126分間は、なんて幸せな時間なのだろうと心から思える作品だ。

『この世界の片隅に』の海外での評価

【イギリス】 映画誌 "otafilm"

「失われたものへの強烈な観念を呼び起こす、爆弾投下前の広島島の精妙な肖像」

【メキシコ】 映画誌 "Cine Premier"

「戦争による破壊を前にした苦闘と家族の価値についての奥深い物語を伝える映画。正真正銘の傑作」

【スペイン】 映画誌 "El antepenultimo mohicano"

「そこには、きめ細やかな美しさを犠牲にすることなく、常に歴史的客観性を維持しようとする厳格さがある。アニメーション映画史上の画期的な作品であるとともに、映画一般という観点でも今年を代表する作品のひとつとなる」

【ドイツ】 映画誌 "Filmdienst"

「並外れた激しさをもつアニメーション映画。戦争の恐怖を少しも誤魔化すことなく、漫画原作を印象派の詩情に満ちた心動かすアニメーションへ巧みに翻案する。この激しくて詩的なリアリズムは完璧な均衡を見つけ、心をかき乱すと同時に元気づけるものとなる」

【アメリカ】 映画批評サイト "RottenTomatoes"

「しばしば劇化の題材となる時代について、他に類を見ない地上の視座を提示する。手描きの美しいアニメーションによってさらに際立つ」

【アメリカ】 ロサンゼルス・タイムズ紙

「片渕は細心の注意を払い、日常生活の美と詩情に控えめな賛辞を送った。それはやがて気づかぬうちに、第2次世界大戦中に一般的な日本人が体験した、惨事からの回復力と自己犠牲への敬意へとシフトしてゆく。ごくありふれた状況に備わる魔法に光をあてる」

【アメリカ】 ワシントンポスト紙

「広島島の静かで壊滅的な物語。片渕は恐ろしい戦争のイメージから逃れることなく、悲惨な結末で映画を終わらせる。しかし、戦争前のすすの普通の生活に焦点を当て、運命に普遍的な共鳴を与えている」

【フランス】 ル・モンド紙

「日本アニメの大きな力強さの1つは、架空の端役に至るまで現実味を帯びさせる方法にある。片渕監督は、広島島の街中、家庭の中、取り巻く景観といった時代のうわべだけでなく、とりわけ日常の気持ちや主題について、綿密に復元作業をした。スペクタクル性を断固として拒み、日々の根気強さの中に、この世界の揺るぎない愛の秘密を見出す。見逃してはならない」

【イタリア】 日刊紙 Il Manifesto

「この主人公の空想的な捉え方は、言葉では言い表せない戦争の恐怖を<正常化>するものであるが、この正常化はほとんど真逆の効果をもって戦争の恐怖をあらわにする。この片渕作品は本当にうれしい驚きであり、近年公開された戦時中を舞台にした長編映画の中で最も成功した作品のひとつである。長く語り継ぐことになる作品である」

【中国】 映画情報サイト Mtime

「このアニメをもって宮崎駿の引退を受け入れることができる。結局のところ、罪と罰や善と悪についての歴史的結論はこの映画が語りたいことではなく、この映画の物語にあるのは政治化された視点ではなく完全に市民の視点である。歴史の節目に道徳上の判断を下すのではなく、普通の人々の情感と悲劇を真に表現するものである」

6/21 『踊らん哉』の感想

- ・ラブコメディですね。そしてミュージカルの様でもあります。ダンスの魅力、正に蝶のように踊る姿、「夢の舞台」を観ているようです。人生は悩みや辛さ、いろいろありますが、光の当て方でプラスの生き方、大いに教えられました。
- ・戦前の映画とは思えません。アメリカの実力は大了たものです。
- ・戦前のアメリカ、しゃれた喜劇、シャル・ウィ・ダンス、楽しかった。
- ・何度か手をたたきたくなりました。何年かぶりの映画ゆっくりみさせていただきました。
- ・若い時に感動した名画をやってほしい。
- ・適度だったり、ギリギリの中でのコメディさがとても楽しかったし、素晴らしかったです。
- ・久しぶりにハッピーな映画でした。フレッド・アステア素敵です。81年前の映画とは思えないダンスです。
- ・やっぱりフレッド・アステアはすごい!! 楽しかったです。
- ・フレッド・アステア、大好きです。ダンスのリズムも歌

もすてきでした。ありがとう。

- ・フレッド・アステアのダンスと歌が秀逸でした。よい機会をありがとうございました。
- ・フレッド・アステアをもっと観たい。
- ・このコンビの映画を何回か拝見しましたが、いつみても新鮮です。すばらしい。
- ・娯楽作品で、とてもよかったです。2人のダンス、タップはステキでした。
- ・久しぶりにタップダンスを楽しく観ました。人生もダンスのごとく!
- ・すごいタップ。バレエも!
- ・人生は踊りでハッピーエンド。心が明るくなりました!
- ・歌と踊りが素晴らしかった。
- ・ダンスが素敵でした。
- ・歌と踊りが楽しかったです。
- ・シャル・ウィ・ダンス、とても良かったです。
- ・楽しかった!

今後の上映のご案内

(上映作品は変更になる場合があります。)

第71回 12月20日(木)

① 10:30 ~ ② 14:00 ~ ③ 18:30 ~

『女だけの都』

第72回 1月17日(木)

① 10:30 ~ ② 14:00 ~ ③ 18:30 ~

『私の頭の中の消しゴム』

第73回 2月21日(木)

① 10:30 ~ ② 14:00 ~ ③ 18:15 ~

『チャップリンミュージュアル社時代1』

上映作品の選出について

図書館に所蔵されている、ホールでの上映が可能な作品を選んで上映会を開催しています。上映の不可は、DVD ケースにラベルが貼られていますので、どなたでも確認することができます。また、上映が不可な作品や所蔵されていない作品からも、これかと思える作品を選んで、予算内でレンタルを利用しています。ただし、家庭用のレンタルとは違い、レンタルできる作品も限られていますので、皆様のリクエストにお応えできる範囲は限られます。

注意



上映中の携帯操作は、周りの方の迷惑になりますのでご遠慮下さい。また、観賞マナーを守り、終了後も明るくなるまで席を立たないようお願いします。上映開始時間を過ぎての入場は、ご遠慮ください。

サロン・ド・シネマについて

6月～9月は、ホワイエが大変暑くなるため、サロンの開催をお休みさせていただいています。水分の補給等、各自でお願いいたします。

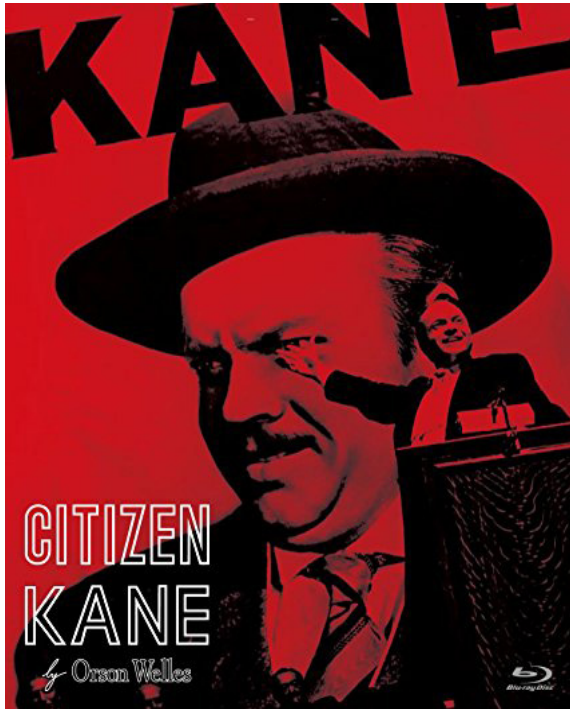
りぶらホールにはヒアリンググループが設置されています。補聴器を利用されている方は、Tモードに切り替えてください。



市民ケーン

CITIZEN KANE

字幕上映



マンハッタンの哀愁

TROIS CHAMBRES A MANHATTAN

字幕上映



9月20日(木)

① 10:30 ~ ② 14:00 ~ ③ 18:30 ~

新聞王ケーンが、“バラのつぼみ”という謎の言葉を残して死んだ。新聞記者のトンプソンは、その言葉の意味を求めて、生前のケーンを知る人物にあたるが……。様々な人物の証言から、新聞界に君臨した男の実像が浮かび上がる、斬新な構成と演出で評判を呼んだ、ウェルズ弱冠 25 歳の処女作。人生を誤った敗北者の虚しい姿が、ラストで明かされる“バラのつぼみ”の正体によって、観る者の胸をえぐるが如く、赤裸々に浮かび上がる。

監督：オーソン・ウェルズ

音楽：バーナード・ハーマン

出演：オーソン・ウェルズ、ジョセフ・コットン、ドロシー・カミングア、エヴェレット・スローン

製作：1941 年 アメリカ モノクロ 119 分

10月18日(木)

① 10:30 ~ ② 14:00 ~ ③ 18:30 ~

『天井桟敷の人々』のマルセル・カルネが、マンハッタンの夜を舞台にしっとり魅せる、孤独な男女のふれ合いを描く恋愛劇。妻に裏切られ、傷心の思いでパリからマンハッタンへやって来た俳優・フランソワは、とある裏町の酒場で外交官の夫と別れたばかりのケイに出会い、二人はお互いの傷心を癒すかのように惹かれていった……。

監督・脚本：マルセル・カルネ

撮影：オイゲン・シュフタン

出演：アニー・ジラルド、モーリス・ロネ

ガブリエル・フェルゼッティ

ジュヌヴィエーヴ・パージュ

ロバート・デ・ニーロ

製作：1965 年 フランス モノクロ 104 分